

Ohayogozaimasu (おはようございます)

人種偏見のさなかで信仰を守ったこの歴史ある共同体（教会）に出席でき本当に光栄です。

私はサラルとシーダー (Salal & Cedar) というこの教区にある教会の者ですが、教会を持たず野外礼拝をしています。(salal, ピンクや白い花をつける灌木) (cedar, 西洋スギ) 私たちは教育、行動、生息地保護による環境正義から、キリスト者の育成を行っています。

最初のステップは、隣人—土着動物や教会に成育する土着植物—を知り、愛する事です。サラルとシーダーの宣教を語るために、2つの植物、サラルとシーダーを持ってきました。

Western Red Cedar(においひば) はよく知られている。世界で最も巨大になる木の一つで、千年以上も生きる。小さな球形の実(コーン)と、うろこ状の葉をつける常緑樹である。

この地の先住民である沿岸サラルのある人々は、シーダーを“命の木”あるいは“長寿を与える木”と呼んでいる。それは多くの有益なことを供給するからだ。

この木は伝統的に、おむつ、ブランケット、バスケット、複合家族住宅などから、捕鯨用の強靱なロープなど、すべてに使われていた。

Western Red Cedar(においひば) は、聖書に出てくるレバノン杉との類似点が多くある。この木は清めのために使われている。“水辺に植えられた木”とはシーダーのことである。レバノン杉は、すべての空の鳥が巣作りする場所である。

さてサラルであるが、この名前に馴染みがないかもしれない。あなた方の誰かは、それを見ると認識できるだろう。サラルは成長が遅く、平らな葉のついた常緑灌木である。つるに白いベルの形をした花を咲かせ、それは暗紫の実になる。サラルは日陰でもよいが、日光のもとでよく育つ。そして山火事のあと、最初に再生してくる植物の一つである。花束を購入した折、花が死んだあとでも、緑の輝く葉が長く残るのはサラルである。

サラルとシーダーは私たちの名前である。なぜなら巨大で荘厳な神、それはシーダーのように驚異を与えるのを知っているからだ。しかしそれはまた、サラルのように小さく、粘り強く、平凡であるからだ。この名前は私たちの概念を反映させている。

それは教会が、シーダーのような避難所とサラルのような耐久さを与えるためだ。名前はまた、水辺で暮らし成長する植物や動物を知らせる私たちの義務を表している。

環境正義は聖公会独自性の側面に繋がる鍵となっている。五つのマルコ宣教の二つである。

No. 4: 社会の不公平な構成を変革すること。

No. 5: 被造物を元のままで保護すること。

環境正義とは、植物や動物を愛し、人間を無視することではない。環境正義は、人間は神が創造された現存の世界で一部ではないかのような“環境”に焦点を合わせるのではない。環境正義は、飢えや人種差別や貧困の問題と繋がる。問題は人間を商品扱いするやり方であり、水、動物、木々、他の植物が使い果たされ、利益を生み出す物として扱われる事だ。

環境正義とは、人間や人間だけではなく、神が創造されたすべては、神聖で、愛され、尊厳の受諾を認識させる事である。そしてこれは私たちを聖書へと導く。

聖書で神は土地、水、動物を語られる。山頂で、特別な木々の近くで、井戸や川の側で、そして大変まれであるが建物で、神と出会う。

出エジプト記の中で、荒れ野はヘブライ人が、マナ（パン）によって神の豊かさに頼れることを学ぶ場所である。エジプト帝国の血統や奴隷制度を学ぶ場所ではない。

ハガル（エジプト人の女奴隷、創世記16:1）は、荒れ野で主の御名を呼んだ。

詩編は被造物である動物、植物、水の姿で満ちている。

エライジャ、エリアは荒野の予言者であった。エゼキエルとイザヤは自然界のイメージで描かれる。そして社会や経済正義の使命のために、しばしば被造物の言葉が使われる。

大斎節の始まりに、聖書を（マルコ福音書1:9-12）拝読する。それはイエスがどのようにヨルダン川で洗礼を受けられたのか、そして御霊がイエスを荒れ野に追いやられる。そこでイエスは野の獣<sup>けもの</sup>とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた。

イエスは宣教の後半に、群衆から遠ざかり、ご自身の霊的糧と祈りの場を求めて、野に水辺に、丘に行かれた。会堂や神殿が争いの場であったからである。

聖書では地上とすべての被造物は、神の愛の言葉であるが、ある時は悲しみでもある。

ヨシュア記とルカ伝で環境正義を探す練習をしよう。

ヨシュア記の節で、イスラエルの民が荒れ野での旅を終えることが記述されている。民は過ぎ越しを祝う—自然の偉大な行為による奴隷からの解放と救出を記念している。この時点では、民は荒れ野でマナを食べていた。それは神の豊かな驚くべき贈り物であったが、貯蔵する事ができなかった。



今、民はその土地からの収穫物を食している（この節は3回も繰り返し強調している）。しかし民が食しているのは、酵母を入れないパンと日干し穀物である。それは農業で収穫したものではなく、荒れ野で集めたものである。民は到着したばかりではあるが…。そのことは民が、その地の先住民であるカナン人の援助、あるいは（物の）交換があったことを示唆している。

福音書は始まる（ルカ15:1）。

『さて、取税人、<sup>つみびと</sup>罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄ってきた。すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った』。

イエスはエルサレムへの長い旅の途上で、受難の金曜日と磔刑に向かわれていた。

その社会の最下層の人々、疎外された人々が、イエスの話を聞こうとやって来た。

ローマ帝国支配と結託して生活をしている人々である。

律法学者やパリサイ人—敬虔な信仰を守る人々、真っ直ぐな姿勢の市民、規範を周知し、守る人々—は苦情を述べる。

今ここで、ルカ伝15:4-10 が抜けているに気が付くだろう。

これらの節で、イエスは二つの短いたとえ話を述べられている。一つは一匹の羊で、もう一つは一枚のコインで、共に失われ、発見された話である。

そしてイエスは二人の息子と彼らの父親の話をされる。このよく知られたたとえ話はいろいろな見方があるが、私たちは環境正義に焦点を当ててゆこう。

弟息子は財産の分け前を要求する。そのことを無遠慮に父親の顔に向かって言う。

そしてその社会全体が聞こえるように—「あなたは私には死んだのも同然である」。

古代近東（地中海の東方）の名誉／恥社会は、父親の体面がすべてであった。

弟息子は公衆で父親を屈辱した。ほとんど考えられないことである。

息子の相続したものは何であるのか？ 土地、家畜、富。

青年は相続財産を持って故郷を去る—これは土地を売ったことである—古代イスラエルでは不動産は売り物ではなく、神からの聖なる委託である—土地は守るべきものであり、決して所有できなかった。沿岸サラル領土は（政府から）割譲されていないが、これを承認させることについて考える余地がある。

飢饉が起こり、餓死を避けるために、弟息子は異邦人のところに身を寄せた。

許されない食物を食べる。それは不浄な家畜—豚のことである。

息子は悔い改め、帰郷する。父親はご馳走を用意する—その土地からの恵みである。

兄息子はどこにいるのだ？ 畑にいる。父の財産を食いつぶす弟を非難する。

自身の祝いの席でも、山羊さえ与えなかったと不平を言う。

この物語で見過ごしているのは、祝宴の出席を拒否するのは、兄息子が自分の父を辱めるはずかしめる事であり、公衆で（父を屈辱した）弟と同様である。

羊とコインのたとえ話のように、両方の兄弟は失われている。

それで父親はどうなのだ？ 私たちの大半は、父親が神であると考えよう。そして神が善い方であるなら、その父親もそうである。しかしこの物語の父親はよい人ではない。

古代近東でよい父親は、厳格で、威厳を備え、情け深く、権威ある人からの命令を守る。その人は実際に風刺漫画の悪い父親である。父親は息子の財産分けの要求を認める。父親は聖なる委託である土地を失うが、息子と縁を切らず、帰宅を期待する。

息子が帰ってくるのを見ると、父親は走り寄る。

地中海の（聖書）読者にとって、これはもっとも衝撃的な物語である。父、年長者、威厳を備えた男は走り寄らない。父親は息子を抱き、口づけする、公衆の前で。

父親のような行動ではなく、母親のような行動である。

祝いが始まった後、ホストは自分の席から離れ、兄息子に命令ではないが出席を求める。両方の息子は恥すべき行動を取っており、父親は恥知らずである。

今この物語ははらはらさせながら終わる。兄息子は祝いに参加するのか？

私たちは祝い、歓喜しなければならない。なぜならあなたの死んだ弟が生き返ったのだ。弟は見失われ、見つけ出された。弟息子は見つけたが、兄息子はいまだ見失われている？ 兄は入ってくるだろうか、あるいは慰めとならない自身の正義を持って外で立つのか？

弟息子は飢饉、失敗、土地からの分離を経験する。そして劇的に迷いから覚める。

そして受ける資格のない歓迎を得る。しかし兄息子はどうなのだ？

無条件の愛にもかかわらず、兄は当然受けるべきことに手を差し出している—弟よりもさらに受けるべきだと確信しているからだ。兄は何年もかかって愛を得ようとしているが、ここで愛は無償で与えられる。

兄はパーティーに来るのか？ 私たちは？

私たちの各々、律法学者と取税人、聖者と罪人つみびと、上層と下層に—同じ招待が出されている。パーティーに来て、食べ、飲み、踊る—その地の豊かさを共有する。

あなた方は歓迎され、望まれる。あなた方が帰属するところに迎えられ、招待される。

そして彼らを好きでなくても、親戚でもなくとも、仲間の被造物がそこに存在する。

お帰りなさい！

（文責長澤猛）

S+C at Holy Cross

March 26, 2022

**Joshua 5:9-12**

**Luke 15:1-3, 11b-32**

Ohayōgozaimasu

I am really honored to be with this community that has such a history of faithfulness in the face of racism.

I am from Salal + Cedar, a church in the diocese that doesn't have a building but worships outdoors. We help Christians grow in ecological justice through education, activism and habitat conservation.

A very first step in that is getting to know and love our neighbours -native animals and plants, like the ones the church.

To talk about Salal + Cedar ministry, I have brought two plants with me: Salal and Cedar.

Western Red Cedar, you may be familiar with, it is one of the largest trees in the world, some living more than 1000 years. It is an evergreen with tiny cones and leaves like scales.

Some Coast Salish people, the Indigenous people of this place call Cedar the Tree of Life or Long-Life Giver because of the many useful things it provides: traditionally it was used for everything from diapers, blankets, baskets, multi-family dwellings -the big house, to rope strong enough for hunting whales.

The Western Red Cedar has all kinds of parallels to the biblical Cedars of Lebanon: it is used for purification,

Sometimes the "tree planted by the water" is a cedar

The Cedar of Lebanon is a place where all the birds of the air build their nests

Now Salal, you might not be as familiar with by name, although some of you may recognize it when you see it.

Salal is a low-growing, flat leafed bush that stays green all year, it has a string of white bell-shaped flowers that turn into dark purple berries. Salal does ok in the shade but thrives the sun, and is often one of the first plants to regenerate after a fire.

If you have ever purchased a bouquet of flowers, and long after the flowers have died, the green shiny leaves that remain is Salal.

Salal + Cedar is our name because we know God in the huge and impressive that inspire wonder like Cedar, and but also in the small, persistent and the ordinary like Salal, This name reflects our notion that the church provides both shelter like the Cedar and sustenance like Salal

It also shows our commitment to know the plants and animals that live and grow in our watershed.

Ecological justice is connected to key aspects of Anglican Identity, two of the Five Marks of Mission:

Number 4: To transform unjust structures of society

And

Number 5: To safeguard the integrity of creation

Ecological justice does not mean:

love plants and animals but ignore people

It does not mean focus on “the environment” as if people were not also part of the living world, God’s creation,

Ecological justice means connecting issues of hunger, racism, poverty and the way that people are treated as commodities, with the way that water, animals, trees and other plants are also treated as things that can be used up or turned to profit

Ecological justice means recognizing that all of God’s creation, human and more-than-human, is sacred, beloved, and deserving of dignity.

And this brings us to Scripture

In the Bible God speaks in the land, waters and animals. God is encountered on mountain-tops, by special trees, beside wells and rivers and very seldom in buildings.

In Exodus, the wilderness is where the Hebrew people learn to rely on God’s abundance through Mana and not the Egyptian empire’s system of extraction and slavery

In the wilderness Hagar sees and names God.

The Psalms, are filled with images of creation -animals, plants, water.

Elisha, Elijah were wilderness prophets, Ezekiel and Isaiah draw on images from the natural world. And their calls for social and economic justice often use the language of creation.

At the beginning of Lent we read how Jesus was baptized in the Jordan and then the Holy Spirit sends him into the wilderness where he is attended by angels and (in Mark’s gospel) accompanied by wild animals.

Later in his ministry Jesus goes away from the crowds, to the fields, to the water, to the hills –for his own spiritual nourishment and places of worship –synagogues, the temple, are places of conflict

In Scripture the earth and all creation is the vocabulary of God’s love and sometimes God’s sorrow.

So let us practice looking for ecological justice themes in Joshua and Luke

The Joshua passage takes place at the end of Israel's wilderness journey

The people celebrate the Passover - remembering their liberation from slavery and their deliverance by great acts of nature.

Up to this point they had been eating Manna in the wilderness, the miraculous gift of God's abundance, that could not be hoarded.

Now they eat the Produce of the land (a passage that is repeated 3 times for emphasis)

BUT what they eat is unleavened cakes and parched grain, it is wild collected food but agricultural harvest even though they have just arrived!

-suggesting that they may have received support or had trade with the Indigenous Canaanites in the land

The Gospel begins:

*Now all the tax-collectors and sinners were coming near to listen to him. And the Pharisees and the scribes were grumbling and saying,*

Jesus is on his long journey to Jerusalem, towards Good Friday and the cross, and the most outcast and marginalized people in his society come to listen to him. People who make their living by colluding with the Roman occupation.

And Scribes and Pharisees—good religious people, upstanding citizens, people who know and keep the rules—complain.

Now maybe you noticed that verses 4-10 are missing.

In those verses Jesus tells two quick parables, one about a sheep one about a coin both are lost and then found.

Then he tells about two sons and their father. There are many aspects of this well-known parable but we are going to keep the focus on ecological justice.

The younger son demands his inheritance To put it bluntly he says, to his father's face and for the whole community to hear—"you are as good as dead to me." In the honor/shame society of the Ancient Near East the father's honor was everything and the younger son publicly humiliated his father in a way that is close to unthinkable.

And what is the son's inheritance? land, animals, and wealth.

The young man takes his inheritance and leaves the country—this means he has sold the land—which in ancient Israel was not real estate, but a sacred trust from God—to be protected but never really owned. Something to think about when we make an acknowledgement that this is unceded Coast Salish Territory.

When famine comes to avoid starvation, the younger son hires himself out to Gentiles, He eats food refuse intended for unclean animals -pigs

When he repents and returns, his father has a feast prepared -from the abundance of the land.



Now the older son, where is he? In the fields. Accuses his brother of devouring their father's property. Complains of never having even a goat for his own celebration.

What is often missed in this story is that by refusing to attend the celebration the older son has shamed his father just as publically as the younger son.

Like the sheep and the coins *both* brothers are lost.

So what of the father? Most of us are used to thinking of the father as God and if God is good then so is the father. But the father in this story is not good.

In the Ancient Near East a good father is stern, dignified, benevolent, and maintains order through authority, he practically a caricature of a bad father. He concedes to his son's request for his inheritance, he loses the sacred trust of land, he doesn't disown his son but anticipates his return, and when he sees him coming he runs.

For Mediterranean readers this is the most shocking part of the story. A father, an elder, a dignified man does not run. Then he puts his arms around his son and kisses him. Publicly. Acting not like a father but like a mother.

After the party has begun, the host leaves his seat and goes to beg, not order, his son to attend.

While both sons have acted shamefully this father is shameless.

Now the story ends with a cliff hanger. Will the older son join the party?

*We had to celebrate and rejoice, because this brother of yours was dead and has come to life; he was lost and has been found*

The younger son is found, but is his brother still lost? Will he come in or will he stand outside with the cold comfort of his own righteousness?

The younger son experiences famine, failure, disconnection from the land then a dramatic coming to his senses and a welcome he does not deserve.

But what about the elder son?

In the face of unconditional love he is holding out for what he deserves—because he is sure deserves more than his brother.

He's been trying for years to earn love and here is Love given away for free.

Will he come to the party? Will we?

Each of us, scribes and tax collectors, saints and sinners, upright and outcast--is issued the same invitation:

Come in to the party, eat, drink, dance -share the abundance of the land. You are welcome and wanted, you are included, invited, you belong—And, whether you like them or not your siblings and fellow creatures will be there.

Welcome home.